

SVC070-P05

会場:コンベンションホール

時間:5月23日 16:15-18:45

古記録からみた新燃岳享保噴火の推移

Reconstruction of the sequence of the Kyoho Eruption of Shinmoedake Volcano based on the historical record

伊藤 順一^{1*}, 及川 輝樹¹
Jun'ichi Itoh^{1*}, Teruki Oikawa¹

¹ 産業技術総合研究所・地質情報

¹ AIST, GSJ

2011年1月以前の霧島新燃岳におけるVEI3以上の噴火は、AD1716-1717の享保年間のものが知られている。従来この噴火の推移は、震災予防調査会がまとめた「日本噴火志」に採録された史料を基に復元されてきた。しかし、「日本噴火志」に採録された史料、「三国名勝図会」や「日本災異志」などは、噴火後百年以上経過した後に編纂された史料であり、記録の信頼性及び具体性に乏しく噴火推移の正確な復元には相応しくない。

近年、神社の記録や地元の行政記録の中に記された享保噴火の記録について、大學(2010, 2011)が広報「たかはる」において紹介している。これらの史料は「狭野神社文書」、「高原所系図巻冊」、「古今山之口記録」などで、後者二つは地域の行政記録を編纂したものである。それらに紹介された史料を基にして、新燃岳享保噴火の推移をまとめ、火山学的な考察を行なう。なお、日付は、和暦をグレゴリオ暦に変換したものをを用いる。

史料からは、第1期:前駆的な噴火活動(1716年4月10日, 5月7日), 第2期:やや規模の大きな噴火(1716年9月26日), 第3期:大規模な軽石噴火(1716年11月9日), 第4期:小規模な噴火(1716年11月9日から1717年2月9日の間), 第5期:繰り返す大規模な軽石噴火(1717年2月9日, 2月10日, 2月13日, 2月17日, 2月18日, 2月21日)とその後の火山灰の放出(1717年2月22日), 第6期:小規模な噴火(1717年3月13日), 第7期:最後のやや大きな(1717年9月6日)に区分される。このうち特に規模の大きかったものは、第3, 5期で、この時の噴火は、大量の火砕物の降下が記録され、その熱によって山麓の集落・寺社が炎上したため、住民が立ち退いたことが記録されている。また、第5期の噴火は顕著な表面現象が無く、突然始まったことが読みとれる。第2, 3, 5期の噴火は、降灰量も記録されている。それに基づくと、第2期(1716年9月26日)の噴火では 0.7 l/m^2 , 第3期(1716年11月9日)では 35 l/m^2 , 第5期の1717年2月17日の噴火では、 7.1 l/m^2 もの降下テフラを新燃岳から30kmほど離れた山之口に降らせた。これら降灰量を2011年1月26-27日の軽石噴火と比べると、第3, 5期の噴出物の体積は、数倍から一桁程度大きかった可能性が高いことがわかる。

文献: 大學(2010) 広報 たかはる. No.588~596, 大學(2011) 広報 たかはる. No.597~599.

キーワード: 新燃岳, 霧島, 享保, 1716-1717, 噴火, 古記録

Keywords: Shinmoedake, Kirishima, Kyoho, 1716-1717, eruption, historical record